

マツ並木歴史ばなしあれこれ⑩

笠取峠のマツ並木保存管理計画の策定により、今までに解っていなかったことが、様々な調査によってひも解けてきたことは大きな収穫だったと思います。特に、資史料に基づく歴史的側面の調査により、本質的価値に含まれ得るような価値が明らかになりました。

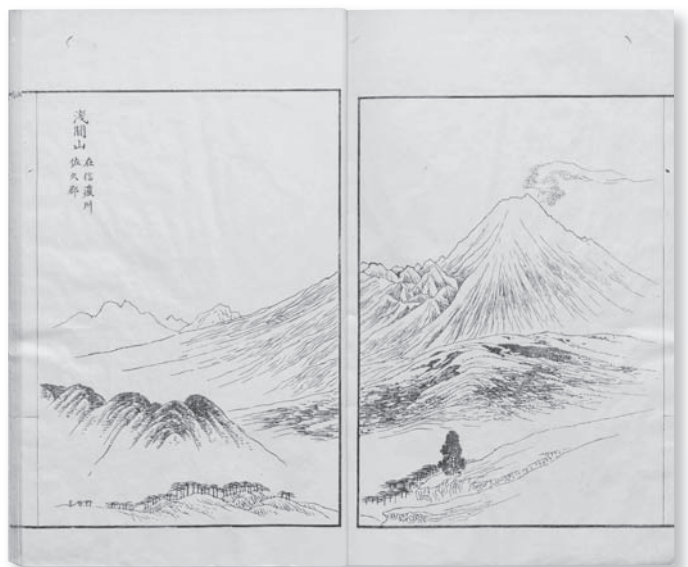
そこで、そのことを整理し、紹介させていただきます。

- ①土塁の発掘調査で明らかになりつつある地下の盛土や道形が、江戸期の文書史料からも明らかになり、史跡的な価値も高いことが確認されました。
- ②文書史料から読み取れる江戸時代の街道及び並木維持の手法が、個体の間隔や垂直位置として今日まで継承され、現地で確認でき、「江戸時代の並木管理の技術史を示す文化財」としての価値を示しています。
- ③絵画史料から、江戸時代に「笠取峠松並木」の典型的な景観イメージとして定着していたと考えられる景観が明らか、かつ、今日まで維持されており、「景観の記憶」とも言うべき名勝的価値が高いものである。
- ④絵図などで浮かび上がる並木の用地が、今日まで「並木敷地」として継承され、江戸時代以来の地割が残っていることが明らかになり、「流通・往来の歴史を土地に刻んだもの」として、文化的景観としても価値があります。
- ⑤江戸時代の街道並木が、近代においても、地域の人々の愛着と努力により、戦争による危機を乗り越え、国道を迂回させて公園化し今日まで継承されていることは、わが国における「文化財保護」並びに「自然保護」の歴史を体現するあゆみを持っています。
- ⑥並木の消長やその動的管理について知ることで多数の資史料がマツ並木とともに残っており、その維持管理などに関連して、当時の芦田地域の様子や人々の営みも知ることができ、「地域の歴史資料」としても価値があります。

価値ある文化財をもっている地域は、その価値に目覚めて誇りに思い、大切に管理しながら残してきた歴史をもっている。そのことが地域の誇りになり、そこに住む人々を元気づける。歴史の証人としてのマツ並木を保存管理しつづけることは、これからの地域にとって大きな課題ではありますが、そのことを誇りにかえながら、皆で守り育ていきたいと感じています。

古文書ばかりでなく、様々な施設に出向きマツ並木に関する資料を探し求める中で、時間的制約の中で詰めきれなかったものもありましたが、そういったことについては、後考に期待し、このシリーズの最終回とさせていただきます。ありがとうございました。

谷文晁「名山図譜」(1804年初版)
のうち「浅間山」
下方に松並木と神代杉が描かれている。



信州大学附属図書館所蔵